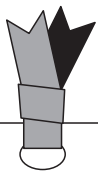


# 『フィンランドの教育力』 なぜ、PISAで学力世界一になったのか

●リッカ・パツカラ・著 (学研新書 定価756円(税込))



小中学生の学力問題を論じるとき、しばしば話題にされるのが学習到達度調査(PISA)である。これはOECD(経済協力開発機構)が2000年から3年おきに実施しており、義務教育修了段階の15歳児を対象に、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3領域の学力を見るものだ。

PISA調査は現代に求められる新たな学力観を提示した点で、日本の教育界にも大きな影響を与えている。こうした状況は入試小論文でも教育系や経済系などで出題されることが予想される。

このPISA調査で毎回、トップレベルの結果を示しているのが、フィンランドである。成績のばらつきが少なく、学校間の格差や落ちこぼれも極端に少ないなどの結

果もあり、フィンランドの教育は全世界で注目されることになった。そこで今号では、『フィンランドの教育力』なぜ、PISAで学力世界一になったのか(リッカ・パツカラ著・学研新書)を取り上げる。

著者はフィンランドの基礎学校(小中一貫教育)の初等教育の元教員である。フィンランドが大胆な教育改革を始めた翌年の1995年に教員となり、10年間で3校の勤務を経験。現在は夫の海外赴任に伴い、日本に住む。本書では著者自らの教職経験を元に、フィンランドの学校や教育の現場、その在り方が詳しく語られている。

## 「教育の平等」は徹底

本書の前提として、まずフィン

ランドの教育制度について見よう。フィンランドの基礎教育(義務教育)は6年間の初等教育と3年間の中等教育による9年一貫制である。基礎学校卒業後は全員が進学資格を持ち、高校か職業専門学校へ進める。基礎学校期間はほとんどテストがなく、高校入試もない。高校間格差もないため、多くの生徒が地元校に進学する。また成績が良くない場合やフィンランド語が十分でない移民の子どもの場合は、本人の希望でもう1年勉強できる。

高校に学年はない。選択した教科の単位を取り、通常3年で卒業するが、2〜4年の範囲内で卒業すればよい。

一方、大学入試は熾烈だ。大学進学を希望する場合は、大学入学資格試験で4科目に合格すれば資

格が得られるが、この試験は1科目6時間もかけ、知識の応用力が問われる。さらに高校からの報告書の点数が加算され、受験可能な学部が決まる。例えば医学部進学希望ならば数学、生物、化学、物理のポイントが高くないと受験の申請書すら受理してもらえない。大学入試も重量級である。例えば教育学部を受験した著者の場合、指定の教育の歴史関連の本を3冊読んで筆記試験に臨んだ。一本のエッセイを書くのに6時間かけ、それを複数の日に分けて4本のエッセイを書いたという。その後、試験官の面接と教授の最終面接を経て、合格となった。フィンランドの大学教育は、質本位でのエリート養成を目指しているのである。驚くべきは「学ぶ者が手厚く守られている」仕組みである。フィンランドでは幼稚園から大学院までの授業が全て無料であり、通学に必要な交通費や下宿時の住宅補助費も出る。高校まではカフェテリアでのランチも無料であるほか、基礎学校での教科書、文具類まで支給される。その代り教科書は数年使い回すなど大切に扱われる。

「フィンランドは天然資源もな

く、林業以外これといった産業もない小さな国です。世界に誇れる企業が数多くあるわけでもなければ、自給率を誇ることもできず、多くを輸入に頼っています。そういう国では、人に投資しないと未来はない」と著者は言う。

94年に若干29歳で教育大臣となったヘイノネン氏も「経済不況の中での限られた予算を投資するならば、いちばん有効なのは子どもたちへの教育だ」と訴えて改革を進めていった。フィンランドは生き残りを賭した国家戦略として、教育を重視していると言える。

質の向上への様々な取組み

著者がフィンランドのPISA試験の好成绩の理由として挙げるのは、これまで見てきた「教育の平等性」「無料の教育費」と共に、「教師のレベルの高さ」である。94年からの教育改革の中心とされたフィンランドの教育力



れたのが、「教員の質向上」である。教員資格が大卒から大学院修士卒に引き上げられ、教育現場の裁量権が飛躍的に広げられた。「多くの人が教師になりたいと思っているが、誰でもが出来る職業ではない」と著者は言う。教師になるには学部と大学院で決められたトレーニングを受けて修士号を取得しなければならず、そもそも高等学校の成績報告書が良くないと大学に進学もできない。「それが教師を目指す学生たちが勉強をするモチベーションになっている」と著者は指摘する。

本書では著者が教員を志望するに至るまでの経緯を、幼少時から詳しく振り返っている。興味深いのは、大学受験失敗後に就いた特別支援学校のアシスタント経験が、教師を志望する直接のきっかけになったことである。

「あの年齢(高校卒業)のころは自分が本当は何をしたのか、確信があるわけじゃない人が多いように思う」と著者は言う。近年は高校卒業後にすぐに大学には入らず、じっくり進路を考えてから進む学部を決める学生が増えているという。こうした猶予期間が認

められているということは、日本の大学受験生にはうらやましい状況である。

次いで、「教育現場の裁量権」について見ると、従来はフィンランドの教育は中央集権的だったが、94年の教育改革によって、地方へと裁量権が移され、同時に学校及び教師一人ひとりに決定権がもたらされることになった。教科書や教材はもちろん、時間割も教員が決めることができ、授業の進捗状況を監督する人もいない。

ただし、きちんと教えていないと保護者から学校長に報告が入る。「結局のところ、教師は行政からも親からも信頼されている。この信頼が教師のモチベーションになる」と著者は誇らしく語るのだ。

こうした教育改革の根本として押さえるべきは「子ども中心の教育への転換」である。著者らが大学で徹底的に教えられたのも「子どもを中心にしたアプローチ」だった。教師は一人ひとりの子どもの可能性を熟知することを、何よりも求められるようになったという。「私が子どもだった時代のグループ学習に比べ、教師の負担は大きく、仕事も増え、責任も重くなり

ます。さまざまなことに対して敏感でいなければ、子どもたち一人ひとりに目配りできません」と著者は言う。これらの技能を身につけるため、大学での教育実習で最も重視されたのが、「子どもたちの観察」のトレーニングだったということだ。

基礎学校の教員となった著者が、現場でどのような実践を行ってきたのか、本書では詳しく書かれている。教科学習の様子とともに、子どもの特性の把握の仕方、勉強が困難な子どもたちへの特別支援教育、教員と子どもたちを支えるサポートチーム、いじめ問題など、話題は多岐に及ぶ。例えばモンスターペアレントなどへの対応を読むと、フィンランドの学校も日本と類似した課題に苦勞していることがわかり、興味深い。

フィンランドと日本では教育の歴史や社会的文化的な状況が異なり、単純な比較はできない。それらを念頭に置きつつも、フィンランドで実現されている「教育の平等性と質の高さ」は、様々な課題を抱えている日本の教育の在り方を考える上で、大いに参考になると思われる。(評=福永文子)